



徳川 尾形正三 三巻



伊國瑞野
吾原碑自校

禮儀
尾狂
正
三

明治三十四年
卯初春
伊育社藏板



此輯をあるものとして留し
其の意を志す所も被認同
秋風を吹きしるの聲と
春の風を吹くは春歌なる
桐園のある一ハを亦不
同の同士の吟歌なる可

海を航し今も海を
あふらふたの海に
しはあふらふ

海の人

唐島の
八月
船



証

高志之海

春秋部

高志や若子揃ひ乃臺也
船乃あふらふ海に
海を航し今も海を
あふらふたの海に
しはあふらふ

高志の海に

東京 素
伊世 陽
尾張 寄陽
東京 可然
芳律
高志 遠宇
伊世 瑞志

高志の海に

目少年にやみ足りなき花を
取まけてよの香けりや
そよよとやと久し待も
花馬もろまてよ
よを也
あそく
や
唐
と
吸
手

目
貴
意
石
下
南
見
福
社
冬

旅ひも
う
う
気
維
蕪
佐
梅
祝
そ
清

新
里
旭
果
神
素
標
全
全
全

三

立多井柳にゆきを球一なり
 茶聲よ初夜はうよまきうん一
 何所てやら道達を驚くそふ外
 松枯の神訪やけり日乃空
 紅乃潮や松亭の初日村お
 とのしちを老のそらに福壽軒
 志をくれば仮名よきよふ原
 七章の初とみ離きやあす先
 拜まはる存りそりの名神の玉
 月あはに依初くやとんし磨

藤原
 著岳 ^{ハリ}
 阿咲 ^{ヒダ}
 稻雄 ^西
 志 ^{サスキ}
 出川 ^{イツモ}
 相州 ^在
 学海 ^志
 仙堂 ^{イノ}
 我上

峯井密やまのうら樹のあり
 不ぬくひる春の存月
 言後旅あやみこもとを屋ま
 煙州崎ひの所作のすき
 ふまよ磨つむれ志を六のぬり
 お白藤よと都合よふく家
 酒をきけおと臨よふらん
 吟をよまれを歌のまは人
 世を今か面白かりあやまの包
 りあま歌屋の梅をらく
 夕月けい後よも志をひやかき

遊字
 禱
 字
 字
 字
 字
 字
 字
 字
 字

秋の陣ひとつそく松島の秋
 指り言ひて知りて返陣し
 三ヶ月前りもけりれ軒馬
 宗永ハ石を則神たきや
 正聲ありたも現譲り知り
 笑指少れうそ見れ吉しよ
 笑むこゝろもく佐保の山娘
 揚子重たあねひもりも啼つれ
 津本の杉戸に果をお基く
 老ぬきと流ふ人多た秋の逢
 甲子之京の山娘のいふ

鶴字字字字字字字字字

色白の膏ハ水の上ハかろん
 情をりふ一掛簾度不
 眼う余の園のたのめけ夕紅葉
 雨かそり前のみ武の園に湖
 片傳の物とも照るのう順気よ
 一文渡一溝も一竿
 立結とつて指もるもよの知り
 こころり伝の流もねお意
 毛のんけ伝もさきりて富て出安塔
 大車一よせひま形はる産社
 花まのゆもものりは整の煙我命

鶴字字字字字字字字字

鳥

日

市井京多丸日如多傳ふ
花の陰とるまて川岸のよりり
誰のころも同——三自

守 物 字

楓園主人より書きたるに

宿をたてまてかきよきりきり
試る茶を備るもてか——
強歩の湯をひ干と成るらん
清り——してある春はあはれ
静とくたまふれさる如月の異
毛んうまきやら編まき及 端

可 然 襦 袴 光 景 然 物 景

役僧の貴細代たふ秋のふ
志々ぬ目とら眼も通ふ無
傳引も心のうちにとり定て
日和有湯な古牙の布
吹ぬとも花有真名の何し——
揃て神のからふと落し
おそを産行各四時

然 物 景 然 物 景

淡香や山陰晴く傳志まは
嵐火あふてはまき香ぬまら
鉾繪より伝くんとけ遠まらに

然 物 景 然 物 景

みーろくおや相の儘て戸をのぞく
 強りけてつらも成そくくーのちか
 為代も朽ぬ岩や世のつらも如
 志つ流や空をたむむ海つる
 ち原さくー鐘の音つ栞原
 岸つりて居るも海原つる
 約つるは舟はつらー海原
 さりとははつらぬ種も昔つる
 開く道見つるもつら日れ出が
 秋つるも昔のつらつらつら
 山柜のちかやつらつらつら

禱 詞
 幻 史
 連 水
 喫 言
 葉 古
 絲 糸
 芳 律
 素 陽
 閑 遊
 文 體
 稲 原

水波つるもつらつらつら
 耳つるもつらつらつら
 昔つらや後縁流ー細線つら
 月つらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつら
 音つらつらつら
 つらつらつらつらつらつら
 神つらつらつらつらつら
 船つらつらつらつらつら
 雛つらつらつらつらつら

採 女
 素 更
 金 羅
 舟 輪
 唯 地
 柳 波
 石 芝
 中 庸
 藤 雨

雛つらつら

蘇州府志

其針のたつるに際るにそとく邪
姉妹見ふけきもや田く急之
古布子出波や卯存の未子冷
睡き吐く一眠くや故海あり
新く咲くも浮雲もけよ今のみ
開く智恵もけよ子養る廟あり
阿ふ徳祠宗西系出扶乃
帰り路学麻を和るもたら
形多年訪正は一い師系
古く玉へるよ
行庵と新 飛越るお新原

松江
磯舟
禱鶴
全全全
全

張る石小紫白ふあらんく静
汲て出た茶も鹹き夏
巻る度は百問路の雪は清
冬は雪くも小松ひく心
秋の月くも夜露の新トく
何れをけりやら原のるれ者
寺側へ得意度める木の子貴
いふぬ噺ハきくぬ年短ら
こちふきへ板りおれをききとけ縁
男の養る男養けふ

静不
禱鶴
所
所
所
所
所
所
所
所

蘇州府志

九

蘇州府志

十一

言傳を言きてあたる五方所

傑り乾けたまの艶 魁

梅柳をちくそ花の段儂り

嚙り野うま波うある時

所 智 所 智

美不様と名を垂るやむおるる

飛石をまむまの象の次上乾

遠く跡の落る象の象より果しふ

まゝ降りの入る月あまきう

月代うそちく山もあまきう

細代の結のとれる象中

智 智 智 智 智 智 智

心れり心たり望心 甲のあ

まゝのあちち何より的事

婦よりも婦を結白めけを飛

た顔も色あり神の体敵

いちくまの順を振回して

師走陣のうまをありよ

月形まゝを急て覚悟の斗をれ

眼ひらんとけ子傳の三昧

こまきうう我少秘村と氣申をり

あちあちを振るるまゝ

花臺おの堂耀もまゝく

智 智 智 智 智 智 智

蘇州府志

十一

解如

十一

海苔焙る香のたも料理場
 大空の陽をまかせし 研膏
 おりしをまざる 居りて外
 化すも 研乳味此 物 膏
 研と 研くも 切連る 芝
 辛き 自ら 夜に 息と とき 此 強
 常の ありを けし 悪く あり
 八重 芥子 けし あり ても あり 増え 形
 在り あり あり あり あり あり あり
 石切 此 齧る せし あり あり あり あり あり
 降 きたり あり あり あり あり あり あり

物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏

有れ 庭 穂の あり あり あり あり あり
 咲き あり あり あり あり あり あり あり
 冷や あり あり あり あり あり あり あり
 手 あり あり あり あり あり あり あり
 まと あり あり あり あり あり あり あり
 あ あり あり あり あり あり あり あり
 溜り あり あり あり あり あり あり あり
 ふ あり あり あり あり あり あり あり
 見 あり あり あり あり あり あり あり
 け あり あり あり あり あり あり あり

物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏 物 膏

解如

十一

解

一

浦子よう初く普徳のきやうえ
 此のやうなうに傳へしは形
 貴は湯らまへに傳りた細る有
 冬も一陣子あつたか
 谷のうらまをた子細き愛なり
 足弱連きて難きうらま
 年齡たけてたても仕能をせぬ
 又もまの果と知りてまよふ
 神の燈籠を尋くまもよと到
 もみちも敵や裸木のうら
 燈のむけ少春はまきくたへく

遊 暫 遊 暫 遊 暫 遊 暫 遊 暫 遊 暫

燈をよこせ後を推く
 是れ燈籠の断りまてはるを解
 障子細あつた 燈籠の誰
 燈の形と免て存るはるの杖
 富士川の中 燈も花系
 春もつたもま直るま 燈
 追ふ所推るまをまの形
 武士の家まよつて流るやつ
 衣袋の或うまを形を
 燈をよこせまののま
 湯流推るも思ひま

遊 暫 遊 暫 遊 暫 遊 暫 遊 暫 遊 暫

解

十一

黄ひも老きとくぬるを片もきや
秋の愛もまを名もと知れぬ年
はあわりの思ふは供の迷ふ心
持つてははらと嬌殿の借
月もやと出たり中して増る心
思ひ紙をきして扇控へり
ろくろくま引人も有らぬ思ふ心
水と暮れと浮きけ打た
そうつら思ふわつら思ふ南の
つらうつら思ふわつら思ふ
日暮ら結白髪りけ思ふ心

解 遊 智 遊 智 遊 智 遊 智 解

やと思ひの思ふ心も位一夏

遊

去年ま借海を何にふも思ふ心
夕ア涼一ふも思ふ心
焼野一も思ふ心
何れも思ふ心
月の思ふ心の思ふ心
秋の思ふ心の思ふ心
思ふ心今思ふ心
思ふ心の思ふ心
思ふ心の思ふ心

解 遊 智 遊 智 遊 智 遊 智 解

解

十四

藤原

十四

年のうちより大塚もあつたら
思案も取中けきたつらつ向て
さしこ海一い福てり取
母を結ぶをくありの案甲状
ひと白きけい捨つは新来
いんりの彼岸仏の教多のく
細記をきら瀧よならり
待らうらうを案一い花候て
多うらり降の結白旅候
伊勢道の一里も能ぬを案
手よりあつらひ結を案

中 中 中 中 中 中 中 中

かりきつて三階とまきし中使わ
借候一とも能りつてあぬ
翌日中山射る候て思案
うらうらうらう一い二目の石
捨つらあるらありのくまへ持
植のふし激て風急取村を境
服のぬいさのさりやこれいあはれ
厚い候とさし候
船をなう岸を放り有代ふ
碇のまきとさし候
吸りの草草一候あつら

中 中 中 中 中 中 中 中

藤原

十四

膳を食くおや明子のつけ引
まををえせつやまらん秋のる

^{作ヨ}茶亭
^{尾張}市楽

楓園氏を詠へ

歌てらき思れど懇誠るまきちり
相一まふのほはちおて保免り
おや砧舟を相手に浦の家
捨もんと出れて儂くひと繁る
故屋の世話やもる甲や初紅葉
ゆり故のきき輝きや月のお
床のゆきや有るまきちり
まのほきま家や輝きまらり

^{尾張}市楽
^{尾張}茶亭
^{尾張}市楽
^{尾張}茶亭
^{尾張}市楽
^{尾張}茶亭
^{尾張}市楽
^{尾張}茶亭

楓園氏を詠へ

志けりさき智や安や松のまの
おのふふれ陽し清ら枝打戸
まつおのほより枝一たゆみ
静か雨のほらりしと
有るれ道もくくく屋敷
布子つらも着あれて居る
ほ小割う清めを佛のころお
うけのよみ女古まの強かきり

^{故人}露松
襦袢
然
然
然
然
然
然
然

神代卷一阿ふお傘一乃偏
 部云唱さハ唱て形うりら有
 上このちのさ文以紅の一海の夏
 宰領を體自懐工丸をさる
 今も控さるる急のさるれやう
 けし〜と納ちう山北境 福
 多さまを山一うける 滴
 遊ふも此ち形さく月を
 ちうらんとぬ〜と付て吹れ
 奉棚人の中もさる出まあり
 ちる香もさる清りの味

密 密 密 密 密 密 密 密 密 密

題よりさ子の思り一田舎医を有
 袋 袋 袋 袋 袋 袋 袋 袋 袋 袋
 号う〜と備交ま向の薩下屋
 四早とひ〜とさるれ 無さる
 巨魁とハハ在媒のち命く宿
 形をたれ何さおちてを 叫ぶ形り
 官居も 形ふ 度き 変芝
 上〜と 法さるる 詠の 舟の 形ナ
 目鏡の 綱乃 湯の 形法ま
 試の 萩の 水揚さ〜と ちる

密 密 密 密 密 密 密 密 密 密

神代卷

十一

人よ成うと思ふしの子
塔ねをきりしときいそぎの
蓮片若くは擲ふ年常
若館も花乃木蔭よのまりて
研石のあむ谷越

成 勢 成 勢 成

こきおきえあれも折せし
踏く流きく影のあま月
初月は列たしく波りあて
かたりて結る冬園のけさ

知 究 徧 陰
知 知 勢 風

橙の色もめてきた餅りやう
なぞしをかりけ居麻ふ
解よりと流るまのき春の雪
苦勞うしも常きをぬ
そこの夏は穰積舌乃の純前
火入るそらと露の煙りの
別るに後とを途て突ひ念を
水よりと夏れりて如
赤と細端のねと土角の荷
荷の眉の乾くのを待
屋瓦を結る夜び一候生日

素 山
屋 勢 知 耕 山 風 勢 知 耕 山

此の夏の候は比良を西面
 花臺り傳ふに思ふにの跡に空
 麦もそのはくはくはふり
 白魚もあまらふ海苔もよくとれ
 煙さうり曲突の下焚
 向て来る運んよのりふかしの
 何と申ふあつたはれおれ
 孫にたぬの種よ又ひら
 娘の道具はそとふさう
 何とけりき教よ心もあつたの
 名さく茶藨を綾少ぬま

風心耕知朝風山耕知朝風

初うの如き地よむか附すと
 輪新まわを不出まふ土谷
 月ハ空より附結まるとるま
 次を穂引もそぬの持ふの
 僧山と懸る本紅葉何
 精進家よこす教蘇立
 船のきこふあま池も掃除
 朝新の眠る花のころあま
 ともや茶藨よこす龍先

風山耕知朝風山耕知朝風

本柱や壁の裏へうつらうつら
 志々一々其れ海高し
 けつ何雨の聲もよそ
 水仙のさきさき
 ひしむる時人あはれ
 志々角にさきさき
 石の傳へるや
 蒼のけし雪見
 一つ
 二つ
 三つ
 四つ
 五つ
 六つ
 七つ
 八つ
 九つ
 十つ
 十一つ
 十二つ

志々
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二

柳のさきで埃目さやめり
 傳へて度をはかり
 柔山さかぬらして
 ふところさきさき
 清らよ浮くさき
 柳子路のさき
 春せらさき
 蟪蛄のさき
 さき

柳
 傳
 柔
 ふ
 清
 柳
 春
 蟪
 さ

花の

廿四

とわくふさげし何れの中は

籠れた影を筆ひの何と

花よりを包まぬこそ生て中夜

衣を又着りしうき春の上

菊 菊 菊 菊

あはれや雪をわたり干拭るを昼

ちりりと落ちるうらみは雪

多夜のあまえ海のの辺を

薄極拂う埃まじり

朝衣を巻るわやま月用意

葉を被を写しはもらひ人

菊 菊 旦 菊 菊 菊 菊

舊集きぬ喉着の束縛結

柄扱て垂る波る振井戸

常きとら籠籠に宿る花の

捨つて見る眼先の銀

裾今よのまはれて汗の残るを

くまの魚の顔は顔かくは月

投らる磯くさるる忘乃情

紫あけ戸のう通は魚の唇

是より少梅と村の名る雪

昔あきこそ履煙の最上

手も肩も脱ぐ花をき花り如

菊 西 菊 西 菊 西 菊 西 菊

菊

廿一

雑記

廿五

維子の巻に書くとやむ
ゆの乃七産とるも陀羅尼舟
ま宛て走阿りやまか何より
米搦は水ハ車に余る厚と
跨々る海に後れ 新板
既既てささささ ねる足さささ
新巻の政此阿ささ 衣自
煉拂は嵐煙ささささささ
氷に上る腔のさささ むき
松葉の巻を舞ささささ 寺ぬけ
通る志願さささ 方角

西 瓜 朝 西 朝 西 朝 西 朝 西 朝

舟の巻種も苦幹ささ
急巻もさささ 局落も解
秋作の十分り 丸里をささ
そ好巻と通し此向をささ
首ささささささ 新巻をさ
と兼味よゆものハ馬の朝
多時平ささささ 細を解
木の芽豆腐此味ゆ力各物
是并固老絶々のハ子此
歌をささささ

西 朝 西 朝 西 朝 西 朝

馬

十六

子代半代齡い言——名の松
 糸の翹れた進む節先
 熟の子に羽力をををゆるらん
 ちのさした家の隣さし手ま
 名存れりとの有るの熟のま
 つらふもあらはれりこれ
 虫けきといふ香宮力何よ念
 首をうけてあつらひと
 海は思ひの激をうきまき
 くらひひと名残——世をま
 くらまも卯のを垣けきまら
 海字 海字 海字 海字 海字 海字 海字 海字

花聖のまじりてを——
 好く事しきかたの春の
 信書は往し能御の早と有り
 何ととも何とせ候へようま
 白綾の幅まうる花御み
 思くらへて持のたさる
 海字 海字 海字 海字 海字

